

日本社会心理学会会報

209号

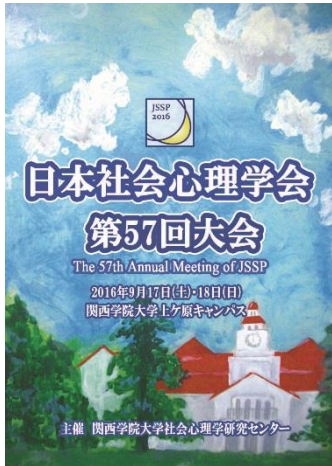
発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2016年3月22日

日本社会心理学会第57回大会へのご案内：ようこそ学問の別天地へ

三浦麻子・大会準備委員長



かねてからお知らせしておりますとおり、2016年度の日本社会心理学会第57回大会は9月17日と18日の両日に、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催することになりました。2月中旬よりオンライン参加・発表申込システムもオープンし、多数の皆様のご参加を楽しみにお待ちしております。今年は7月から8月にかけて2つの大きな国際会議、ICP2016とIACCP2016が開催され、多くの方々が参加・発表をご予定、あるいは準備に関わっておられると思いますが、それらが終わり、さあ改めての実りの秋のスタートに、是非当地に足を運んでいただければと存じます。

日本社会心理学会の年次大会の歴史をひもときますと、関西学院大学は第1回大会(1960年)以来、日本のどの大学よりも頻繁に、実に5回(1, 10, 21, 31, 46)にわたり開催をお引き受けしてきたことが分かります。つまり関西学院大学は日本の社会心理学の発展に常に寄り添ってきたということになります。5回のうち4回は故・田中国夫先生、直近の第46回は藤原武弘先生が大会委員長を務められ、社会学部を中心に運営されました。今回は「社会心理学研究センター」の主催です。センターと申しましても大きな建物があるわけでも、莫大な予算がついているわけでもないのですが、「特定プロジェクト研究センター」という学際的共同研究を推

進する学内制度を利用して、社会学部の他にも文学部や法学部に所属する社会心理学やその近接領域の研究者が、学部や研究科の壁を気にせず集える仕組みとして作った組織です。センターを作ろうと着想したのが2014年の秋、そしてまさに設置申請の手続きを進めていた12月に大会開催の打診をいただきました。なんという渡りに舟…と思ったのは首謀者の私だけだったかもしれませんが、ともかく、2015年4月のセンター設置とほぼ同期して、開催に向けて具体的な準備をスタートさせました。十分な準備期間が確保できております分、できること、すべきことについてはそのすべてを可能な限りよい形で実現させるべく、全力を尽くす所存でございます。

そもそもこうした経緯で設置したセンターを中心に運営することもあり、第57回大会のメインテーマは「社会心理学の学際性を追究する」ことです。これを明確に打ち出すために、2つのシンポジウムと1つのワークショップを企画いたしました。シンポジウムでは政治学と比較認知科学、ワークショップでは医療・臨床系の研究者をお招きして、それぞれの領域と社会心理学との接点を探ります。順に、日本選挙学会、日本動物心理学会、日本パーソナリティ心理学会との共催です。また、社会心理学のみならず科学一般において喫緊の課題である再現(可能)性問題、そしてグローバル化への対応についても議論できる場を考え、再現(可能)性問題については世界的プロジェクトの中心的存在のお一人である Dr. Daniël Lakens 氏による招待講演を、グローバル化については英語による社会心理学教育に関する実践的なワークショップを企画しています。プログラムとイベントの詳細については大会 Web サイトを是非ご覧下さい。

さらに、大会という枠をはみ出していくつかの連携企画も進行中です。9月14日と15日に関西大学千里山キャンパスで開催される日本パーソナリティ心理学会第25回大会とはアフターカンファレンスも共催させていただき、サンプルサイズに関するレクチャーを9月16日午前に開催します。同日午後には新規事業委員会の企画が開催される予定です。また、9月19日には「院生リーグ」が開催される予定とも聞き及んでおります。さらには、懇親会では「アイデアインキュベーションセッション」と題して、研究の「種」について忌憚なく議論し合える場を設ける予定です。それぞれ詳細については学会メールニュースやソーシャルメディア、学会/大会 Web サイトにて随時広報いたしますので、お見逃しなきようお願いいたします。

この他にも、現地に来ていただかないと体験できない、数々の企画を仕込み中です。上記をお読みになって「いくら何でも肩に力が入りすぎでは…」と思われたかもしれませんが、ほっと一息の小ネタもあれこれ考えております。われわれ準備委員会の手で準備できないものはただ一つ、会員の皆様によるご参加とご発表です。これが数多くいただけてこそその年次大会ですので、是非ともご高配のほど、よろしく願い申し上げます。



(みうら あさこ・関西学院大学)

- 日本社会心理学会第57回大会 Web サイト:<http://www.socialpsychology.jp/conf2016/>
- 大会準備委員会 Twitter:<https://twitter.com/jssp2016>

速報：第3回春の方法論セミナー開催

2016年3月16日に、新規事業委員会企画による第3回春の方法論セミナー「統計的因果推論への招待」が上智大学四ツ谷キャンパスで開催されました。学会 Web サイトと会報前号(208号)に詳細があるとおり、「統計的因果推論という広大な森に踏み込むための第一歩を提供する」ために、大塚淳先生(神戸大学)、林岳彦先生(国立環境研究所環境リスク研究センター)、星野崇宏先生(慶應義塾大学)、清水昌平先生(大阪大学)という斯界の最先端の研究者たちを講師にお招きしたこの機会に、会場には191名(うち会員71名)が集い、またUstreamによる生中継には616件の視聴者数がありました。ご講演の様様や資料のうち、講師の許諾の得られたものは追って学会 Web サイトで公開いたします。また、当日の様様と参考資料については**広報委員会によるまとめ**がご参考になれば幸いです。毎回、学会内外に反響の大きいこの春のセミナー企画、今から次回も楽しみです。なお、次号(210号)に参加記を掲載します。



2015年度日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考結果と講評

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。本年度は、43件もの多数のご応募をいただきました。4名の選考委員による厳正な審査の結果、以下の5名を受賞者と決定致しました。選考委員の先生方に各自、講評を書いていただきましたので、併せてそちらもご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山口裕幸

[選考結果]

■受賞者(応募書類受付順)

- 中尾元** 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程1年
包括的認知をめぐる異文化間能力に関する異文化間心理学と文化心理学の統合的研究
- Charis Eisen** 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程1年
When the Absence of Choice Equals Freedom: Culture and Agency
- 鈴木伸哉** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程2年
モラル遵守のダークサイド: 不公正と危害が援助要請の回避に及ぼす影響の検討
- 仁科国之** 玉川大学大学院脳科学研究科修士課程2年
評価懸念の神経基盤の解明: VBMによる検討
- 井上裕香子** 東京大学大学院総合文化研究科博士課程1年
利己的な協力は、利他性の評価を上昇させるか?

受賞者の皆さん、おめでとうございます。

詳しい選考経過と受賞研究課題の要約は**学会 Web サイト**をご覧ください。

[講評]

北村英哉 先生(関西大学)

主に博士後期課程に在籍、あるいは進学する若手研究者にとっての課題は博士論文の完成であり、博士論文となっていく研究を積み上げていくには、既存の理論やモデルの枠組みの上に何かを構築することの方が、構成のしっかりした取り組みにしていやすい。しかし、ある意味些細な改善点を取り上げることは、どれほどの学術的進展をもたらすのか。博士論文のオリジナリティは、他の人たちが手をつけなかった新たな領野を切り開くくらいのもので研究を開拓していくことが本当に面白い。もちろん若手研究者奨励賞は博士論文の計画審査でも何でもないので、研究の貴重なオリジナリティというのは普遍的に重要なことのように考える。応募された計画のなかにはその点で物足りないものも見られたが、どうしても計画の緻密さや仮説の説得性、科学性、いわゆる「よく出来た研究計画」と見られやすいのは、そういった既存のモデルの利用が有利に働きやすいと考えているのかもしれない。その一方で、新たな思いつきの部分がレビュー不足なのか、考慮が十分でなく、妥当さに欠けると考えられたものもあった。受賞を獲得した研究の中では、既存のレビューから出発してもやはり全く新しい仮説枠組みを提示して、斬新な視点を示している研究、すなわち、従来の枠組みを持ちながら、それを突破していくといったタイプの研究が多かったという印象だった。若手の方々の優れた構想力を多

く読ませてもらう学びにもなった点は感謝申し上げたい。受賞に至らなかった優れた惜しい研究も多くあったので、受賞を逃した応募者も自身の研究をしっかりと進めていただければ幸いである。

外山みどり 先生(学習院大学)

43件という今年度の応募件数は昨年よりも多く、最初に研究課題名の一覧を見たときには選考は相当困難な作業になるだろうと予想しましたが、終わってみるとそれほど大変でなかったのは、応募書類が読みやすく、興味深いものが多かったためと思われます。全般的に研究計画の質は高かったといえます。ただ、研究目的はすぐれているのに研究方法が十分練られておらず、このやり方で目的を達成できるか疑問に思えるものもありました。短期間に応募の準備をするのは大変ですが、社会心理学の研究において、理論構成と実証的なデータ収集とは両輪となるものですから、両者が整合的であることが大切です。研究テーマは多岐にわたっており、若手研究者の関心の広がりを感じました。短期的に結果が出やすいコンパクトな研究を目指すよりも、それぞれの分野での今後の発展につながるような広い視野をもち、本質的に重要なテーマを若い方々が追究して下さることを願っています。

今井芳昭 先生(慶應義塾大学)

本奨励賞の平均的な応募件数ではあるようなものの、43件という多くの応募があり、いずれの研究にも申請者の意気込みが伺われ、評定するのに苦労しました。記憶、情動から自己、利他行動、協力行動、集団、文化差まで多様な研究テーマがあり、また、その方法についても、3つの研究まで計画されている申請、海外やインターネット上でのデータ収集を計画しているもの、脳科学的手法を用いたものなど多様でした。評定の際に注目した点は、申請者の立てた仮説導出の論理性、仮説とデータ収集との対応性、研究課題の多面的な検討などですが、申請された研究テーマに含まれる(暗黙の)社会性についても評定項目になると判断しました。

研究計画のパターンとして大きく2つに分けられるようです。1つ目は、既存の研究にある程度準拠しているもので、先行研究の土台がある分、発展形を比較的考えやすく、複数の研究を計画してしっかりした研究という印象を受けます。2つ目のタイプは新しいモデルや枠組みの構築ですが、その妥当性を確認するためのデータ収集には、ややもすると洗練さが乏しくなります。審査者としては後者の意気込みも評価していきたいと思いました。

山浦一保 先生(立命館大学)

いずれの申請書も意欲的な内容であり、絞り込みは大変難しいものでした。その中で上位に挙がってきた内容は、個々人と社会が繋がる中でみられる矛盾をうまく突き、その機序の解明に挑む姿勢を強く打ち出したものであり、第三者/審査者に「今後の知見や展開がみたい」と思わせるものでした。その思いを左右したものは、例えば、独創的な研究として見(魅)せるとき、従来の視点や方法を駆使した中(着実性)からスパイスの効いた新しさが提示されているかどうかという点でした。あるいは、その研究の目指す“社会”の未来予想図は、人間・社会の本質的な理解に迫り、より多くの人が望む魅力的な社会を実現する視点を有したものであるかといった点でした。今回惜しくも受賞枠に入らなかった申請書の中にも、十分期待できる要素が散見されました。今後それぞれの成果が発信され、学術的にも実践的にも豊かな知見が蓄積されることと思います。

広報委員責任編集コンテンツ(3)「海外での研究・教育」

縄田健悟

今回の広報委員責任編集コンテンツのテーマは「海外での研究・教育」である。実は私自身は、留学経験や在外研究経験が無く、英語さえかなり苦手である。海外での研究と教育を行っている・行ってきた人に多大な尊敬の念と少しばかりのコンプレックスを抱きながら日々を過ごしている。狭い日本に閉じこもってはいかん！とまでは言わないが、やはりもう少し世界に目を向けた研究や教育を行うことは必要だろう。

現在のところ、海外での留学先や就職先としては、欧米が選ばれることが多い。心理学領域における「海外留学・在外研究のすゝめ」的な案内も多くは欧米の大学が紹介されることがほとんどである。それは欧米の大学が世界の研究を牽引していることが多いからであるが、海外での研究・教育の形にはもっと多様な形があるはずである。非欧米の大学も視野にいれることで、欧米一辺倒・英語一辺倒ではない海外での研究・教育のあり方が見えてくるだろう。

というわけで、このたびの編集コンテンツでは、海外での研究・教育として、特に非欧米圏での研究・教育生活を取り上げたい。本記事では、韓国での大学教員を経験された藤井勉氏に、韓国での研究と教育に関してご紹介をいただく。藤井氏は、もともと韓国にゆかりのある方というわけではない。学習院大学で博士後期課程を経て助教をなさった後、韓国語もまだ分からない中、韓国にある誠信女子大学校に日本語教員として就職されたそうである。日本の大学を卒業した後に、非欧米圏での大学教員として就職されるケースは、私の周りではこれまであまり聞いたことが無く、極めて示唆に富むものである。ぜひお話を伺いたいとご執筆をお願いしたところ、ご快諾いただいた。

私がわざわざ指摘するまでもないが、研究の世界でもグローバル化が進んでいる。しかし、英語で学会発表をすれば、英語で論文を書けば、グローバルな研究者かと言うと、それは一面的な見方だろう。本コンテンツが、特に非欧米圏での大学教員・研究者としての就職を選択肢の一つとして、考える一つのきっかけになれば幸いである。

(なわた けんご・九州大学)

韓国での3年半の教育・研究生活

藤井勉

韓国で大学教員に？

もともと、「海外で働く」ということは私の人生の予定にはありませんでした。私は語学にもさして自信がなく、何より飛行機が苦手なのです。そんな私が韓国で3年半、これまで教育・研究にあたってきたのには、様々な偶然があります。

まず、韓国への赴任が決まった際、私は学習院大学で助教をしていました。2年を過ぎ、3年間の任期満了後のことを意識するようになったものの、どれだけ公募に応募しても通りません。困り果てていたときに、以前、国際比較研究のプロジェクトに参加した際に知り合った先生を通じて、韓国の大学で日本語日本文学科の教員の公募が出ていることを知りました。

私は学士・修士・博士課程ともに「心理学」に関わってきました。日本語教育の知識もなく、韓国語も分かりません。子どもがいる今なら選択肢には入れられなかったでしょうが、当時ほとにかく必死だったのでしょう。気づけば書類を揃えて応募していたのです。

その後、なんと「面接」の案内が来ました。国際学会には何度か参加したことこそあれ、恥ずかしながら一人で海外に行くのが初めてだった私は、面接どころか「そもそもきちんと行って帰って来られるのか？」と、「はじめてのおつかい」に行く子を見守る両親のような不安を抱きつつ(行くのは私なのですが)、何とか1泊2日で面接を受けて帰ってきました。

結果は「採用」。嬉しさ半分、いや2割くらいでしょうか、残りは不安の中で慌てて準備をし、2012年9月に着任しました。初めは「分からないことしかなかった」韓国での生活も、3年以上過ごす中で多少はマンになりました。韓国語は未だにあまり話せず、たまに授業で使うと「先生が韓国語喋ったぞ！」という驚きの目で見られるほどです。そんな私ですが、多くの人の心理的・物理的援助に支えられて、何とかやってこられました。

韓国での教育活動と学生の様子

韓国の学生は、日本の学生と比べて感情表出がとにかくストレートで、良くも悪くも「素直」という表現がしっくりきます。着任して最初の授業で学生に何と言われたか、今もはっきり覚えています。できるだけ平易な日本語を使うよう心がけて一生懸命スライドを作り、授業をどのように進めるかについて説明していると「先生、分かりません」との声。そりゃそうか、と思いつつ、「どこが分からない？」と尋ねると「全部」。そして「韓国語で説明してください」と追い討ち。冷や汗が伝いました。

ただ、今になって思えば、それも当然です。当時の私は今より早口で話し、難しい表現ばかりを使って説明していました。当時はそれが最大限のパフォーマンスだったのですが、今になって思えばひどいものでした。年を経るごとに少しずつ慣れていき、今ではこういったクレームはなくなりましたし、学生との距離も近くなっていきました。1年生のときは私の言っていることがほとんど理解できず、不安そうに授業を受けていた学生も、今や私の寒い冗談も笑ってくれるほどに上達し、多くの学生は休み時間にも積極的に話しかけてくれるようになりました。「やりがい」とはこういったことなのだろうと強く思いました。

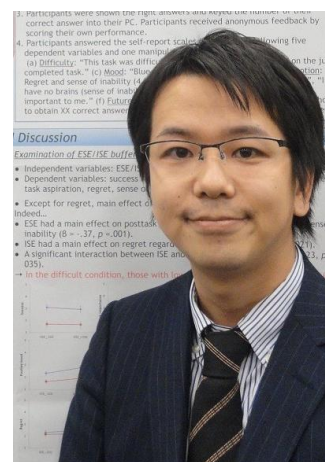
こちらでは日本語に関する授業のみに従事していましたが、日本人である自分がいかに日本語を知らないかを思い知らされました。「実務日本語」という授業で敬語を徹底的に扱ったのですが、たとえば、「行く」という動詞について、同じ謙譲表現でも「伺う」と「参る」の2つがあるのはなぜか、という質問にヒヤリとしたり(動作の受け手が敬意を示す対象かどうかが判断基準です)。その意味では、韓国に来て日本語教育に従事することで、自分の日本語も多少は洗練されたのではないかと考えています。

私は心理学を勉強してきている以上、少しでもそれを授業で活かしたいと考えていました。そこで、会話の授業ではドクターズミス問題や、バスケットボールのパス回し中にゴリラが横切るビデオなども取り上げ、私たちが気づかないうちに偏見を持っている可能性、他の情報に気を取られて、重要な情報を見落とす可能性などに基づいて授業を行ったりしました。そうした少し変わった授業スタイルも、学生は気に入ってくれたようです。

ところで、韓国の学生はとにかく勉強します。なぜでしょうか？(勉強しない方がおかしいという声も聞こえてきそうですが。)日本の大学は、就職活動時に成績はそこまで重視されないように思いますが、韓国では成績は最低限の条件とも言えます。一定以上のGPAを持っていることが、就職試験の受験資格の一つとなっていることもあるようです。そのため、中間・期末テスト時はただならぬ緊張感、重たい雰囲気にも覆われています。どれだけ難しいテストにしたつもりでも得点分布が大きく右に偏ってしまうような猛勉強っぷりなので、1点の差で評価が分かれたりすることもしばしばです。出題ミスや採点ミスがないよう、私も毎回緊張しています。

加えて、学生は過酷な就職活動を乗り越えるために、大学在学中にいろいろな「スペック(spec)」を身につけなければなりません。たとえば語学関係の資格、TOEICの高スコア、ボランティア経験、インターン経験、留学経験、何らかの受賞経験など。日本の場合、入学した後はいかに「リアルを充実させるか」に重きを置いている人も多いでしょう(少なくとも私はそうしたいと思っていました)。それはそれで楽しいのですが、韓国で同じことをやっていると置いていかれます。かといって、学生たちは全く遊ばないわけでもありません。話を聞いてみると、記憶を無くすほど飲みすぎたり、夜遅くまでカラオケで遊んでいたりと、海外旅行に出かけたりと、けっこう楽しんでいるようです。そういう意味では、韓国の大学生はメリハリがついた生活をしているとも言えます。

そして、特に興味深いと思ったのが、年齢や関係性をとても重視するところです。日本では浪人や留学などの理由で同じ学年に年上の人がい



でも、多くの場合は気にせず友達言葉で接することが多いと思います。ところが、韓国は1歳でも年が違えば、同じ学年でも「お兄さん、お姉さん」になり、基本的に敬語を使って話します。年上の方が「偉い」のです。

また、自分にとって重要とみなした他者(学科の先輩や教員など)への振る舞いは特に礼儀正しいと感じます。もちろん、見えないところで何を話しているか私には分かりませんが、少なくとも対面時の挨拶は丁寧ですし、メールの文章もとても丁寧な書体です。このことはとても印象的でした。

韓国での研究活動

韓国は、OECD加盟国の中でもっとも自殺率が高く、深刻な社会問題になっています。私は臨床心理士ではありませんし、いわゆる臨床的な介入をすることは不可能です。ただし、近年の社会心理学的な研究知見から、新たなアプローチの可能性を見出しました。キーワードは「潜在的自尊心」です。

これまで、自己報告で測定する、いわば「顕在的」自尊心の研究は数多く行われ、自尊心が高いことは精神的な健康と結びつく、という自尊心神話が長らく君臨していました。しかし近年は、顕在的自尊心が高くても、間接的な方法で測定する「潜在的」自尊心が低い場合、内集団ひいきをしやすい、抑うつ傾向が高いといった、あまり望ましくないパターンが見られることが示されてきました。また、個人の中で顕在的自尊心と潜在的自尊心の乖離が大きいほど、自殺念慮が高いといった研究もみられています。そうすると、ひたすら「(顕在的)自尊心を高めよう！」というトレーニングや介入は、人によっては何ら効果をもたらさない可能性すら出てきます。

自殺という深刻な問題に、社会心理学的なアプローチが生かせないかと思いつき、数年前に国際学会で知り合った韓国の共同研究者とともに、顕在的・潜在的自尊心の研究にあたっています。今のところ、顕在的・潜在的自尊心のズレが大きく、しかも潜在的自尊心の方が高い状態にあると、抑うつや孤独感が高いとか、主観的幸福感が低いといった結果が得られています。抑うつや孤独感は自殺念慮とも一定の関連がある変数なので、これらの変数に対する潜在的自尊心の影響を検討することは、自殺の問題に対しても貢献しうると考えます。

もちろん、仮に自殺念慮に潜在的自尊心が一定の影響を及ぼすことが分かっても、どうすれば潜在的自尊心が向上(変容)するのか、という難しい問題が待っています。しかし、この研究を進めることで、自殺は極端な例だとしても、人の心理的健康に少しでも寄与できればと思っています。

これからの私と韓国

実は、この原稿を書いている今の私は、本年2月29日をもって誠信女子大学を退職した身です。右も左も分からないまま必死で過ごしてきた3年半でしたが、この時間と経験は私にとってかけがえのないものになりました。先に少し触れましたが、外国で、外国人として暮らすということは様々な困難が伴います。住居の契約、携帯電話やインターネットの契約、日々の買い物など、日本にいれば簡単に解決できることも、文化や言葉の違いによって、初めは分からないことだらけです。学科の先生方や助手さんにもたくさん助けていただきましたし、韓国で知り合った方々(日本人・韓国人を問わず)にも、いくらかお礼をしても足りないほどのお力添えをいただきました。3年半、この地で生活してこられたのは、こうした方々のおかげです。

私と韓国との関係はここで終わりにするつもりはなく、韓国の共同研究者とともに、これからも研究を続けていきたいと思っていますし、帰国後も折に触れて韓国を訪れ、将来的には日韓の国際交流事業などにも携わりたいと考えています。

(ふじい つとむ・元・誠信女子大学校(韓国))

会員異動 (2015年12月15日~2016年3月17日)

入会

《正会員》

・一般

大久保慧悟(ディップ株式会社)、木川智美(立正大学大学院心理学研究科)、佐々木秀綱(一橋大学商学研究科)、福井斉(梅花女子大学心理こども学部心理学科講師)

・大学院生

滝口雄太(山梨大学大学院教育学研究科教育支援科学専攻)、田中皓介(京都大学大学院工学研究科)、寺坂泰斗(神戸学院大学人間文化学研究科)

退会

鄭顯玉、張筱、安塚俊行、山田弘司、山根郁子、兪叶韻

所属変更

太田さつき(静岡産業大学)、永房典之(淑徳大学短期大学部こども学科)、平松隆円(Suan Sunandha Rajabhat University)、関谷直也(東京大

学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任准教授), 白岩祐子(東京大学文学部社会心理学研究室専任講師), 武藤麻美(東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科専任講師), 佐藤 拓(いわき明星大学教養学部地域教養学科), 鄭顯玉(三重大学大学院教育学研究科社会心理学研究室), 江暉(愛知大学東亜同文書院大学記念センター), 高木幸子(常磐大学人間科学部准教授), 小谷恵(アサヒグループホールディングス(株)発酵応用研究所)

『社会心理学研究』掲載予定論文

第31巻第3号(2016年3月刊行)

《原著》

稲増一憲・三浦麻子「「自由」なメディアの陥穽:有権者の選好に基づくもうひとつの選択的接触」

今在慶一朗「手続き的公正要因としての説明責任と鄭重さに対する中心的・周辺の認知処理の影響—裁判での弁護活動を模したコミュニケーション実験」

第32第1号(2016年8月刊行予定)

《原著》

津村健太・村田光二「社会的排斥が集団成員の類似性の知覚に与える影響」

三浦麻子・楠見孝・小倉加奈代「福島第一原発事故による放射線災害地域の食品に対する態度を規定する要因:4波パネル調査による検討」

毛新華・大坊郁夫「中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果:中国人大学生の自己評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討」

白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり「「知ること」に対する遺族の要望と充足:被害者参加制度は機能しているか」

《資料》

古川善也・中島健一郎・森永康子「罪悪感が被害者への補償行動に及ぼす影響:三者関係における資源分配パラダイムによる検討」

嘉瀬貴祥・坂内くらら・大石和男「日本人成人のライフスキルを構成する行動および思考:計量テキスト分析による探索的検討」

第32第2号(2016年11月刊行予定)

《原著》

二木望・渡辺匠・櫻井良祐・唐沢かおり「実体性が両面価値的な集団への行動意図に及ぼす影響:エイジズムに着目して」

《資料》

北梶陽子・曾根美幸・佐藤浩輔・小林 翼・大沼 進「四人のジレンマゲームにおいて他者について考えることが協力率に与える影響」

編集後記

今号は、若手研究者奨励賞、広報委員責任編集コンテンツと、若手会員の方々のご活躍(への期待)が溢れる内容となりました。国や学会の境界を超えてどんどんと活躍の場を拓げていく方々を見るにつけ、そのバイタリティに敬服すると共に、日本社会心理学会はそれをサポートしうる存在としていかにあるべきかを考えさせられることしばし、です。とりあえずできることをできるだけ、とは思いますが…。そんな「できること」の1つとして展開している「[大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度](#)」へのご応募、〆切が今月末に近づいています。まだの方は、是非。(asarin)